

A Classico-Romanticist Thoreau

水野眞理

1. はじめに

本発表では、Henry David Thoreau の最初の出版物 *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1848) (以後 *A Week* と略称) における引用行為を取り上げ、romanticist の枠組みで捉えきれない Thoreau の姿を考える。アメリカの自然と深く付き合い、紛れもなく romanticist であった Thoreau だが、出版という社会的営為に関わるとき、Thoreau は川旅の描写の形をとりながら、その夥しい引用によって文学的な自己を演出しているように思われる。

A Week は 1839 年の夏の二週間にわたる兄との Concord, Merrimack 両川の舟旅の記録という形をとっているが、出版は実際の経験から数年以上あとであり、記憶に大きく手を加えたものとなっている。Thoreau 自身の記憶、川旅の途上で書き留められたわずかな日誌、舟旅のあとの 10 年間に綴られた日誌、彼自身の詩、気に入りの文学作品からの夥しい引用を入れつつ、航行記からの digression としての思索、すなわち人生論、自然論、文学論、地方史などを展開したため、*A Week* は (1867 年版で) 400 ページを超える長篇となった。*A Week* 執筆の契機となったのは、舟旅の 3 年後に亡くした兄への追慕だというのが定説であるが、そのような情緒的な側面、また土地と自然の観察に基づく思索的な側面に加え、手元にある材料を組み合わせ、旅と詩論・思索を併せ持つ「教養ある」作品を構築する、という側面にも目を配りたい。

2. Thoreau の引用癖

A Week において Thoreau が多く引用するのは、韻文では Homer, Virgil, Ovid といったギリシャ・ローマの詩人と、Chaucer から 16, 17 世紀の英詩人であり、18 世紀の英国詩人やロマン派の詩人からは (きわめて身近であった Emerson と友人の Channing からを除いて) 殆ど引用していない。散文では New England の植民史関係の書物と、インドおよびゾロアスターの哲学書がしばしば引用される。

Thoreau の古典の知識の基本は Harvard 大学時代に得られたものであり、その当時、大学での文学教育は古典教育を意味していたから、彼の中の文学的蓄積が *A Week* の材料として供されているとしても驚くにはあたらない。*A Week* で頻繁に引用される 16, 17 世紀の英国詩人としては、Spenser, Shakespeare, Donne といった「キャンオン」に加えて、Samuel Daniel, Giles Fletcher, Francis Quarles など「渋め」の詩人も多い。そこには、「時代をさかのぼれば言語は絵画的になり、言語は揺籃期には、詩であった」(*Nature*, 36) とする Emerson の言語観、また Emerson が後年にアンソロジー *Parnassus* を編む材料となった詩の抜き書き集を Thoreau に貸し与えたこと、そして、当時名を馳せたスコットランドの文人 Alexander Chalmers (1759-1834) 編の英詩アンソロジー 21 巻 (1810) などの影響が指摘される。しかし、Thoreau の引用はこれらのアンソロジーにはない作品も多く、その引用の基準は彼独自の判断にあって、文学的権威によるものではない。実際、結実しなかったものの Thoreau 自身もまた英詩アンソロジーを企画していたという。

ギリシャから 16, 17 世紀の英詩からの引用は、Thoreau の詩についての考察を支えるものであり、そこには自作の詩も多く入れこまれる。このように見た場合、*A Week* は、1841 年に始まった英詩アンソロジーの計画が川旅の記述に形を変えて、彼の詩人としての自己表出として結実したとみることができよう。

3. Spenser からの引用

16 世紀の末期に出版された *The Faerie Queene* 『妖精の女王』とその作者 Spenser は、18 世紀末にロマン派詩人たちにより再発見され、その中世趣味、ロマンス性、語りの方としての Spenserian Stanza が Shelley, Keats, Mary Tyghe らに評価された。19 世紀アメリカにおいては Nathaniel Hawthorne と Thoreau が Spenser を意識していた顕著な例といえようが、Hawthorne の関心が Spenser のロマンス性とアレゴリー性を中心としたのに対し、Thoreau が好んで引用する Spenser の詩行には、パストラル性を帯びたものが多い。

たとえば、外見は粗野ながら品性を備えた人物の家に逗留したことを語る中で、かつて Connecticut 川に沿って旅した時のことを回想しつつ、*The Faerie Queene* 第 3 巻での風景描写が引用される。「心地よい谷間で / 周囲を山と深い森に囲まれ / それが谷間に影を投げかけ / 堂々たる劇場のような様相を与え、 / 広々とした野へと広がっていた。 / 中央には小川が小石の間で戯れ / 小川は、小さな声で、小石が自分の流れを / 阻むと

いって文句を言っているように思われた。」(III, v, st.39, 2-9) 旅人に宿を提供するアメリカの農家を包む風景が、Spenser の寓意物語の古典的な「心地よい場所(*locus amoenus*)」にも匹敵するとする。それは、Hudson River School 的な領土拡張欲を誘う雄大なものではなく、小規模で牧歌的な風景である。文明と自然の景観、礼節と粗野、といったテーマは、まだ原野の残るアメリカ、そして Native Americans との遭遇を繰り返してきたアメリカの歴史を振りかえる Thoreau にとって常に意識に上るテーマであっただろう。上記の引用の最後 2 行は、農家に宿泊して川の音を聞きながら眠りにつく場面の描写で再び引用される。古典的な風景描写は、内的、個人的、小規模な経験に重ね合わせられる。Thoreau は古典をなぞる人という意味での classicist ではなく、古典的な要素を自らのものとして消化吸収する人なのである。

4. Quarles からの引用

A Week では、Spenser からの引用 6 に対し、Francis Quarles (1592-1644)からの引用は 13 と多い。英国王党派の聖職者で寓意詩人として 17 世紀にはその絵入り宗教寓意詩集 *Emblems*(1634)が人気を博した Quarles だが、その後よく読まれているとはいえないキャノン外の人物であり、Chalmers 編、Emerson 編の英詩アンソロジーのいずれにも取り上げられていない。そんな Quarles を Thoreau は *A Week* とは別の書簡において、「Quarles はどうしようもなく古風ですが……彼は時にはシェイクスピアレベルの高尚な言語の使い方をします。そして彼には素直なところはあまりありませんが、頑丈でねじ曲がった材木のようなところがあります。」(*Letters to Various Persons* (1865)と評価し、*A Week* 中で多く引用している。

Thoreau は Quarles のスタイルにしばしば“manly”、“manfully”といった形容を捧げるが、それを無骨、と解するなら、言語の原初的な状態に詩がある、と論じた Emerson の見方に通じているかもしれない。そしてそれは、Wordsworth と Coleridge が *Lyrical Ballads* 『抒情民謡集』(1798)で実践した、民衆の言葉で詩を作ること、というモットーにも通じる、という意味では romantic と言えるであろう。一方、Chaucer, Wordsworth のうたいぶりを“feminine”と呼んでもいる。Thoreau の gendered poetics は機会を改めて考察する必要がある。

5. Thoreau の詩と詩論

実は *A Week* で最も多く引用されている詩人は Thoreau 自身であって、その数は実に 60 を超える。それらの形式は民衆的な響きのあるものから、高雅な響きのあるものまで、多様である。

Thoreau は、英国で採録された民衆詩バラッド、たとえば Thomas Percy 編 *Reliques of Ancient English Poetry* (1765) 所収の作品や、アメリカの歴史を語るバラッドを *A Week* 中でしばしば引用し、彼自身のバラッドの韻律やそれに近いリズムを用いた詩を多く挿入している。一行に強迫を 4 または 3 置くこの詩形は、日本語の七五調にも似たメトロノミックなリズムで、教訓的な内容を持つ詩行が深刻になりすぎず、民衆のことわざのように響かせる働きを持つ。

その一方で Thoreau は、18 世紀の英詩界を席卷した弱強五歩格でも作詩している。新古典主義の旗印のようなこの韻律は、17 世紀の Quarles も 18 世紀の詩 Pope, Swift なども用いたものである。詩 “My life is like a stroll upon the beach”において Thoreau は、1843 年に Staten 島に住んだ頃の海辺の散歩を想起しながら、自分たちの舟旅に重ね合わせる。一行おきに脚韻を踏みながらゆったりと進む詩行は、詩人が海辺を歩く様に呼応しつつ、手に入るものを大事にしなが悠然と生きていく人生を肯定する。

A Week 執筆においてまだ三十歳前後であった Thoreau は、このようにスタイルも内容も多様な韻文作品をエチュード的に造りながら、詩人としての腕試しをして見せているようにも思われる。

詩について述べた箇所では Thoreau は、言葉の文化の最盛期を Chaucer とエリザベス朝の詩に代表させ、とりわけ、技巧よりも確かさ、率直さという点で Walter Raleigh を高く評価する。Raleigh に代表される 16, 17 世紀の英文学には力強さと自然さがあり、現代の詩に比べてより緑の濃い大地、より深く力のある土を思わせる、という。また、文章の喚起力 implication についても植物の隠喩を用いて「彼らの文は、常緑樹のように緑で……事実と経験に根差しているのに対し、我々の時代の虚飾に満ちた文章は樹液も根もなく花の色をしているだけなのだ。」と論じ自然へのまなざしと詩へのまなざしを融合させている。*A Week* は旅の記録、自然論、哲学書であると同時に、詩論でもある。川旅の記述は、彼の詩人としての——classicist そして romanticist としての——自己表出として結実したとみることができよう。